

“長谷川農園視察同行記”（新潟県新潟市）

平成24年11月28日、“JAいわい東園芸作物青年部『スーパー菜野人』”の皆さんの視察を案内してきました。視察先は弊社が長年お付き合い頂いている新潟市のチンゲンサイ農家・長谷川農園さん。

数十年にわたってモミガラ堆肥による土作りを続け、1年を通じて安定的な出荷をしている長谷川氏に土作りの“本質”の部分について話を伺ってきました。

今回は岩手県一関市のJAいわい東の若手生産者達をご案内しました。JAいわい東管内ではトマト、キュウリ、小菊、果樹などの園芸作物が栽培され、またブランド牛の産地でもあり、耕畜連携の農業が盛んな農協です。中でも今回の参加者たちは長谷川農園のモミガラ堆肥には興味津々で土作りに関心が高い様子でした。

メンバーが車を降りると挨拶もそこそこに、長谷川氏の案内で農園の心臓部である堆肥積みの現場へと移動。『どうぞ、登ってみて下さい！』と促されて、堆肥の山に登ってみると、見渡す限りの田んぼで堆肥の材料は無尽蔵だ。



発芽率の向上、根量の充実、苗のロス率低下などのモミガラ堆肥の有効性について、長谷川氏のご自分の経験とともに説明してくれた。手間をかけて作った土にはその分だけの“力”があるという事だ、特に施設栽培ではその“力”が無ければ、連作など出来るものではない。長谷川氏は成功も失敗もすべてを気さくに話してくれた。

現在、この堆肥は近隣の農家でも利用されていて、様々な作物が作られている。ユリやチューリップなど球根類でのロス率の圧倒的な軽減、バラ苗生産においては根頭癌腫病の根絶、ルレクチェなどの果樹栽培、水稻、地域のブランド作物となっている“黒崎茶豆”などの栽培に貢献しているそうだ、また輪菊栽培では大きな賞を受賞した農家さんもいるとのこと。



長谷川農園では数十年の連作でも連作障害は無い、そしてそれを恐れていない。『病気が発生しても、一時的で部分的なものだから問題にはならない。時々くしゃみが出るくらいのもんだね。』と笑う。年間にチンゲンサイを9回以上させるためには“必要な量の堆肥を必要なだけ”入れなければならないが、肥料分の多くなりがちな畜糞原料の堆肥では投入量を抑えなければならなくなる。そのためには植物原料で作った肥料成分のほとんど無いこのモミガラ堆肥が欠かせない。連作しながら安定的に栽培し、周年の出荷をするためには、堆肥を入れるか入れないかという事だけでなく、その“質”がいかに重要かという事だ。

『視察と言っても月並みな内容になりがちなものだが、今回は格別に面白い視察だった』とは、参加者の弁であった■